

奇跡のレッスン

(50号 2015年11月14日)

先日、NHKで放送された「奇跡のレッスン」をご覧になった方も多いと思います。これは、アメリカの元 NBA 選手のマグジー・ボークスさんがコーチとして東京のあまり強くない中学校のチームを指導するという番組でした。

この番組は私に多くの示唆を与えてくれました。何よりも強く心に残ったのは、指導者の「言葉の力」です。そして、この「言葉の力」を支えているのが、彼の人生哲学であり、バスケットボールに向き合う姿勢であったと思います。また、指導者として選手を見つける目はいつも、「子供たちは背中を押してあげれば飛躍できる。大人として何ができるだろう」ではなかったでしょうか。

番組を見ながら私がメモをした彼の言葉があるので、見逃した方のためにここに記してみます。

「もっと楽しく、もっと激しく。一人ひとりからチームとしての化学反応を起こせ。」

「スポーツと人生はよく似ている。仲間に対しては良き人であり続け、良いプレーを通して絆を築いていこう。」

「一定以上の勉強ができないとアメリカではスポーツはさせてもらえないよ。」

「子供たちがネガティブなことばかり聞かされていると彼らの思考もネガティブになっていく。指導者はほめることを忘れてはいけない。」

「自分の可能性に気づこう。指導者は気づかせよう。」

ボークスさんはどんな場面でも、どの子に対しても絶えず温かく、勇気づける言葉を掛けていきます。その中で子供たちに意識の変化が起こってきます。自分にもやれるのではないか、失敗を恐れることはないのではないか、バスケットは楽しいスポーツではないかと感じてきます。そしてそれがチームの力となっていきます。これが化学反応でしょうか。

そしていよいよ最後の日、格上のチームとの練習試合に臨みます。今までは一方的に負けていた相手です。果たしてどんな結果が待ち受けていたかというところ、タイムゼロまで同点でしたが、最後は負けるという試合でした。このゲームの後、ボークスさんはチームの子供たちにどんな声を掛けたのかをご紹介します。終わりたいと思います。

「みんなが見せたスポーツマンシップはすばらしいものだった。」

「人生においてもその姿勢は続けていこう。」

「自分を信じて努力すれば、こうなりたいと思う人間に必ずなれる。」

「感動をありがとう。」